

東舞子

2016/11/1 (11月号)
神戸市立東舞子小学校
平成28年度学校だより
<http://www.kobe-c.ed.jp/hmi-es>

継続は力なり

校庭の木々も色づき始め、秋の気配が色濃く感じられるようになりました。本格的な文化・芸術の季節の到来です。事前の鑑賞希望アンケートでお知らせしておりますように、本校では、今月の11日と12日の両日に渡り音楽会を開催いたします。子供たちは、各学年で取り組む歌唱曲や合奏曲の発表に磨きをかけるため、一生懸命練習に取り組んでいます。音楽会当日は、是非ご来校いただき、子供たちの練習の成果を会場でお聴きください。また、10月に実施されましたクリーン作戦（PTA・青少協主催）と学校オープンデーには、多数の保護者の皆様に参加、参観していただき、ありがとうございました。

さて、1か月ほど前になりますが、今年もノーベル賞受賞者の発表があり、東京工業大学栄誉教授の大隅良典氏がノーベル医学生理学賞を受賞しました。日本人のノーベル賞受賞は、3年連続で25人目。さらに、医学生理学賞は、昨年の大村智・北里大学特別栄誉教授に続く4人目ということです。研究の成果は、細胞が自分のタンパク質を分解してリサイクルする「オートファジー（自食作用）」と呼ばれる仕組みを解明したことで、この研究の成果が、癌やアルツハイマー病などの病理の解明や治療に向けた新薬の開発に役立つであろうと期待されているそうです。私には、オートファジーの詳しい仕組みについての知識はありませんが、大隅教授の研究により、癌やアルツハイマー病で苦しんでいる人々の治療解明に役立つのであれば、素晴らしい研究の成果であることだけは理解できます。私が興味深かったのは、大隅教授のインタビューで「基礎的な研究の大切さが、若者の意識からだんだん薄れてきている。素晴らしい研究の芽生えを見極め、引き上げるシステムが大事だろう。」と話されていることです。大隅教授の研究は、流行に左右されることなく、少人数でコツコツとオリジナルのテーマに取り組んだ基礎的な科学の探求であるということです。大隅教授が小さい頃、自然科学に興味をもったきっかけは、12歳年上の兄が、大学在学中に帰郷の際、お土産として持ち帰った児童向けの科学読み物だったそうです。「競争するのは好きじゃないし、勝つ自信もない。」大隅少年は、「人と違うことをやる。誰も見たことがない現象を見るのが楽しい。」と、信念を貫き、約40年間、顕微鏡を通して見える酵母に科学の真理を問い続けてきました。そして、少年時代からの夢だった「ノーベル賞」受賞という栄冠をつかんだのです。最後に、大隅教授は、こうも言っています。「偉くなろうとしたら駄目。自由に研究できる時間を大事にしてほしい。本当に役立つのは100年後かもしれない。将来を見据え、科学を一つの文化として認めてくれる社会を願っている。」

大隅教授がノーベル賞をした要因は、彼の家庭が研究者の一家で、そのことが、自然科学に興味をもち、研究者としての道を志す土壌を育んだことや、40年以上に渡り基礎研究に打ち込んできた飽くなき探求心があったこと、人がやろうとしない研究に着手したこと等、たくさんあると思います。勿論、素人の想像の域をはるかに超える医学生理学上の大発見があったからこそ、ノーベル賞を受賞されたのだと思いますが、その一歩は、私たちの日常生活の身近にあったことに驚かされます。

よく「継続は力なり」と言われますが、三日坊主の私には、40年以上の長きに渡り細胞の基礎研究に取り組んでこられた大隅教授の業績は、尊敬の念以外の何物でもありません。社会的な風潮は、目先の成果を優先するあまり、大局的な視点や長期的なビジョンで物事を推し進めることに否定的なように思います。けれども、科学的な発見や研究は、数多くの失敗の積み重ねの上に成り立っていることを考えると、私たちが日頃、成果が得られないと諦めている活動の中に物事の真理が眠っているのかもしれない。いつの日か、東舞子小学校の卒業生からも、ノーベル賞受賞者が現れることを期待しつつ、子供たちの成長を見守っていききたいと思います。

校長 梅鉢 泰博